



四万十町
町内ぶら〜り散策

市ノ又

窪川から国道381号を大正方面へ走る。広瀬(弘瀬)トンネルをくぐると旧大正町エリアとなり、ほどなく北の川の街が右手に現れる。郵便局のあるところを右折して住宅地を抜けるとすぐにT字路があり、そこを左、つまり西に入ると市ノ又である。相去川の支流の小川に沿った1.5kmほどの細長い集落で、南側の山は低く日当たりが良い。牛の放牧が行われている斜面も見える。

戦国期や江戸時代の記録には「一之股村」とも「一のまた村」とも記されていて、当時は北ノ川(喜多川)村を構成する枝村であった。北ノ川村在住の庄屋のもと、ここには名本という役職が置かれていたようである。村名の表記は明治に入りしばらくして「市ノ又」となった。

市ノ又地区の産土神は「氷室天神社」である。少名彦命を祭神とする氷室天神社は、地区の西奥にあり、地区全体を見渡すように建っている。

さて、この氷室天神社の裏に地区の集会所があるのだが、その中に、以前氷室天神社鳥居横にあった茶堂が移されている。四国各地には茶堂が多く見られるが、ここ旧大正町旧上山郷にも多くの茶堂があり、だいたい山越えの道が里に下りてきたあたりにある。ここ旧上山郷の茶堂は、その多くが戦国期にできたとみられている。山を越えてきた旅人や、これから山を越えて行くかという人々に、この茶堂で村人が無料でお茶やお菓子の接待をするのである。また、弘法大師信仰の場としても大切な存在であった。

ここ市ノ又にある茶堂も、地区の北西に位置する「芳川(先月号)を取り

上げた」との人々の往来において、癒しの場として機能していたという。元々は、現在の位置より少し北西にある小高い山の麓近くにあったのだが、そこからいったん数メートル下に移動し、さらに神社横に移転。その後、老朽化もあって、地区の集会所が建てられる時にこの中に祀られることになった。祀られている石仏が2体。どちらにも「一ノ又村中安全」と刻まれている。また片方の弘法大師の石座像には「安政三辰年」とあるから、江戸末期に彫られた石仏であろうと思われる。この石仏が実に良くできている。指や耳、また袈裟のドレープまで、細かい仕事丁寧になされている。先月号で紹介した芳川の茶堂にある石仏と仕事の質が似ているようにも思える。市ノ又と芳川は山越えの道で繋がっていて、人々の往来があった。彼らにとって、芳川の茶堂という給水所の次の給水所は、市ノ又の茶堂であった。その繋がりが、両茶堂の石仏が同じ仏師の作であるかもしれないと想像してみただけでも、両石仏の文化的価値がある。

市ノ又地区には現在5世帯、10名が暮らしている。



集会所内に祀られている石仏。

町のうごき	(11月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	四万十川の 水質状況	適正值(mg/l)	12月1日
	男	7,848	-14	男 3	13	5	9		リン酸	≤ 1.0 測定範囲以下
	女	8,638	-11	女 4	8	1	8		硝酸	≤ 0.5 0.299
	計	16,486	-25	計 7	21	6	17		アンモニウム	≤ 5.0 測定範囲以下
	世帯数	8,356	-4				(11月中の届出)		アニオン活性剤	≤ 1.0 0.15
	窪川地域	11,673人		大正地域	2,294人		十和地域		2,519人	化学的酸素要求量 ≤ 10.0 測定範囲以下
調査：大正(吾川) 資料：四万十高校自然環境部										